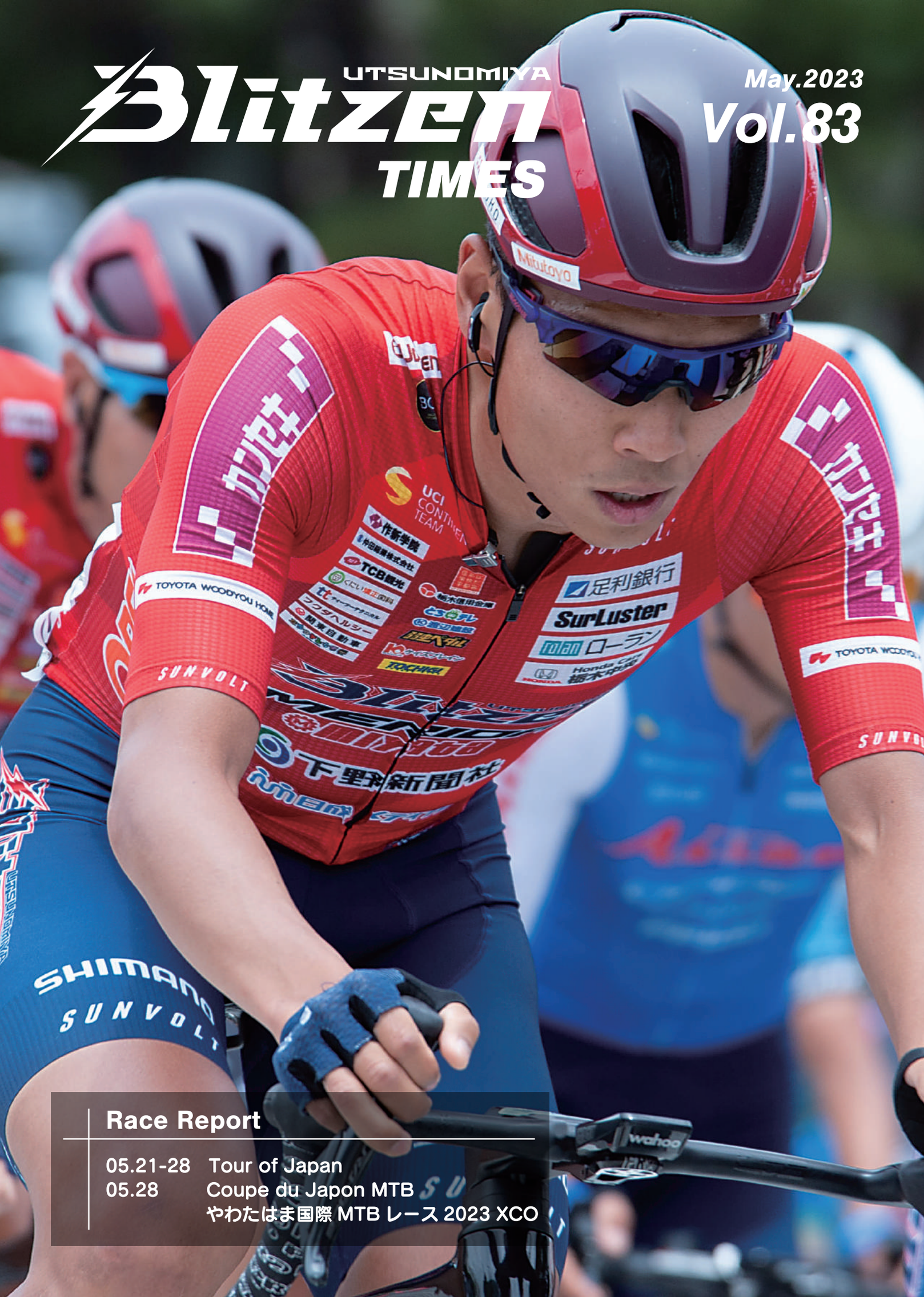
UTSUNOMIYA Blitzen TIMES

May.2023
Vol.83



Race Report

05.21-28　Tour of Japan
05.28　Coupe du Japon MTB
やわたはま国際 MTB レース 2023 XCO

ツアー・オブ・ジャパン　堺ステージ

西村ブリッツェンの初舞台 8日間のTOJが開幕！

Digest movie

前座レースの堺国際で小野寺玲が2位に!!

5月21日～28日までの8日間、全8ステージで行われる日本最大のステージレース「ツアー・オブ・ジャパン（以下TOJ）」が開幕した。昨年はCOVID-19の影響を受けて後半の4ステージのみに短縮され、8日間8ステージのフル開催は実に4年振りとなった。

TOJ本大会の前に、初日は堺ステージ独自レースとして「堺国際クリテリウム」が開催された。堺市といえば日本が誇る自転車パーツメーカーで、宇都宮ブリッツェンにもパーツ供給を行う「シマノ」が本社を構えることで有名だ。サイクルシティ堺として、独自レースやイベントを行うことで自転車文化を盛り上げた。

その堺国際クリテリウムは1周2.7kmのコースを10周する合計27kmで行われ、沿道の観客たちの目を釘付けにした。レースは決定的なアタックも決まらぬまま終盤を迎え、宇都宮ブリッツェンは阿部嵩之とフォン・チュンカイが前方をうかがいながら、小野寺玲のスプリント勝負に向けてフォローする。最終コーナーでフォンのアシストを受けて発射した小野寺は2位に食い込み、表彰台を獲得。本レースに向けて幸先の良いスタートとなった。優勝はギリシャ出身のゲオルギオス・バグラス選手（マトリックスパワータグ）。

その後行われた第1ステージは、大阪府堺市の大仙公園周辺を舞台にした個人タイムトライアル（TT）。今大会は西村大輝監督が挑む初めてのUCIレースであり、初の大舞台だ。チーム一丸となって新しくなった赤いイナズマの存在をアピールしたいところ。

レース前、チームキャプテンを務める谷順成は「4月、5月とこのレースを目標にチームを高めてきた。僕自身としては8ステージは初めてだが不安はない。しっかりと総合上位を目指していき、各ステージでも区間優勝を目指せる布陣だと思う。チームをまとめて素晴らしい8日間にしたい」と。また自身についても「すごいいい状態で来れた。富士山ステージが一番タイム差がつきやすい。力の差が出るため総合を争う上では重要になるが、それまでのステージで遅れては意味がない。自分にも勝つチャンスはあると思うので、臆せずに攻めていきたい」と意気込みを見せた。

なお、TTは小野寺の22位が最高位だった。

堺国際クリテリウム　リザルト

1位	ゲオルギオス・バグラス（マトリックスパワータグ、ギリシャ）	0:34:31	22位	フォン・チュンカイ	+00:03
2位	小野寺玲（宇都宮ブリッツェン）	+00:00	41位	阿部嵩之	+00:24
3位	ルーク・ランパーティ（トリニティ・レーシング、米国）	+00:00	47位	谷順成	+00:30
			63位	本多晴飛	+00:48
			85位	堀孝明	+01:11

TOJ 2023 第1ステージ 堺　リザルト

1位	ルーク・ランパーティ（トリニティ・レーシング、米国）	3:06:34	22位	小野寺 玲	+00:09:31
2位	リアム・ジョンストン（トリニティ・レーシング、オーストラリア）	+00:01:48	25位	本多晴飛	+00:10:54
3位	岡篤志（JCL JCL TEAM UKYO）	+00:01:70	30位	フォン・チュンカイ	+00:10:81
			31位	谷順成	+00:10:82
			42位	阿部嵩之	+00:12:10
			88位	堀孝明	+00:21:57

【小野寺玲のコメント】

クリテリウムは阿部さんが前半からフォローしてくれて前方をキープできました。ゴールに向けて位置取りが激しくなる中、フォンのサポートで最終コーナーを前方でクリアし、ベストポジションからスプリントする事が出来て2位でゴールとなった。今後もゴールスプリントで大きく期待が持てるレースとなりました。午後からのタイムトライアルも踏めていたので、この先狙えるステージでチャンスを掴みたい。

【西村監督のコメント】

堺国際クリテリウムで小野寺が 2 位に入ったのは嬉しい。チームの連携がしっかり機能していたため、今後のステージにも繋がっていくと感じた。フォンは脚力があるだけではなく、位置取りが本当にうまく、エーススプリンターの小野寺をうまくゴール前に連れていってくれた。個人 TT に関しては、宇都宮ブリッツェンには距離が短い TT を得意とする選手がいない。その中で小野寺の 22 位は健闘したと思う。残りの 7 日間もチーム一丸となって良い成績を残せるように頑張りたい。

ツアー・オブ・ジャパン 京都ステージ

谷順成好調。総合上位を目指して本格スタート

Digest movie

スプリントを狙った小野寺 パンクに泣いたが切り替えて

全8ステージで行われる日本最大のステージレース「ツアー・オブ・ジャパン（以下TOJ）」の第2ステージ京都。小刻みなアップダウンが激しいコース設定で、2017年には宇都宮ブリッツェンの元選手・雨澤毅明さんがステージ優勝を収め、ポイント賞も獲得した相性のいいステージだ。

前日に続き予想最高気温が29度という暑い日になることが予想されており、湿度も上がって、来日した欧州の選手には厳しい気象環境であっただろう。

京都ステージはアクチュアルスタートからアタックが決まる傾向にあるが、この日はアタックはあるものの、しばらく決定打がなく、残り4周目でジャンバルジャムツ・セインベヤール選手（トレンガヌ・ポリゴン・サイクリングチーム）が飛び出しに成功。2021年ツアー・オブ・タイランドで総合優勝をしたモンゴル人選手だ。ほどなくして山本元喜選手（キナンレーシングチーム）、中井唯晶選手（シマノレーシング）、兒島直樹選手（チームブリヂストンサイクリング）が追いつき、4名で残り3周に入った。

集団はマトリックスパワータグがコントロールし、残り2周回となるとJCL TEAM UKYOが強力な引きを見せ始め、ファイナルラップ手前で4名を吸収。30名ほどとなった集団のゴールスプリントを制したのは、マトリックスパワータグのゲオルギオス・バグラスだった。

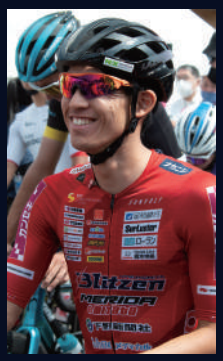
宇都宮ブリッツェンはフォン・チュンカイ、本多晴飛がパンク、その他の選手も細かなメカトラに見舞われたが、もっとも不運だったのが小野寺玲のパンクトラブルだろう。最終周回のKOM（フィニッシュまで残り約11km地点）からの下りで、パンクにより脚を止めることとなってしまった。スプリント勝負のステージだっただけに、「トラブルがなければ、勝負をする脚は残っていた」と悔しさをにじませる小野寺。ステージは2分48秒遅れの48位のゴールとなったが、続メイン集団の中でフォン、本多と共にゴールはできた。またキャプテンの谷順成は、トップとタイム差なしの26位と調子の良さを見せており、全体的には翌ステージへと繋ぐ安心材料は見られた。長いステージレース、こういう日もあると思い、チームは切り替えていった。

【谷順成のコメント】

レースを振り返ってみると、4 人は集団ゴールができているので、チームの総合力はあるのかと感じる。トラブルが多くあったので、チームとしては勝負に絡めず残念だった。

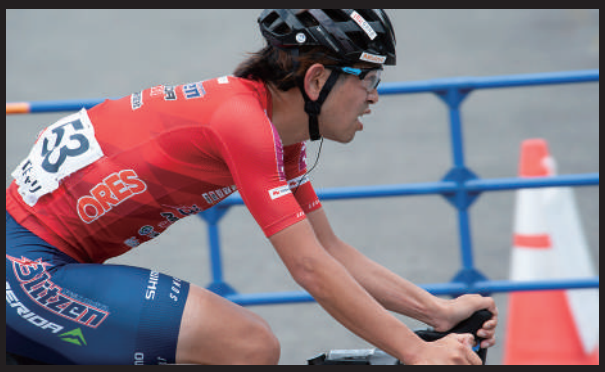
【西村監督のコメント】

谷の総合順位を上げることと、小野寺を筆頭にステージ優勝を狙っていたが、機材トラブルに見舞われてしまった。しかしそれもレース。気持ちを切り替えて、これからの厳しいステージに臨みたい。



京都ステージリザルト

1位	ゲオルギオス・バグラス（マトリックスパワータグ、ギリシャ）	2:43:08
2位	岡篤志（JCL JCL TEAM UKYO）	+00:00:00
3位	ベンジャミ・プラデス（JCL JCL TEAM UKYO、スペイン）	+00:00:00
26位	谷順成	+00:00:00
35位	本多晴飛	+00:02:04
37位	フォン・チュンカイ	+00:02:04
48位	小野寺 玲	+00:02:48
72位	阿部嵩之	+00:07:59
73位	堀孝明	+00:07:59



ツアー・オブ・ジャパン いなべステージ

大逃げが決まるステージで谷が最小タイム差ゴール

Digest movie

谷の総合順位を死守するためにチーム一丸となってアシスト

三重県の最北部に位置し、滋賀県と岐阜県と接しているいなべ市は、アウトドアとサイクルツーリズムに力を入れる自転車乗りもウェルカムな土地柄。2015年に初めてツアー・オブ・ジャパン（TOJ）のステージに組み込まれて以来、毎回、白熱したレース展開でファンを楽しませてきた。勝負ポイントは、フィニッシュ地点のいなべ市梅林公園へ向かう道幅が狭くなる急坂区間（通称：いなベルク）。そして、その先の山岳ポイント（KOM）までの最大勾配17%の激坂区間が、選手たちを苦しめる。間近で選手たちの熱い走りが見られる、TOJ屈指の観戦ポイントとなっている。

そんな三重県いなべステージがコロナ禍の中断以降、4年ぶりにTOJへと帰ってきた。地元の歓迎ぶりもひとしおだ。スタート時には降り続いていた雨も止み、路面も乾いた良好なコンディション。出走ラインには前日の厳しいレースから6名減り、90名の選手たちが並んだ。宇都宮ブリッツェンのメンバーは6名とも元気な姿を見せた。

三岐鉄道北勢線の終着駅、阿下喜駅前から定刻どおりにパレード走行がスタート。最前列には、緑、青、赤、白の各賞リーダージャージを着用した4選手のほか、三重県の紀南市に本拠地を置くキナンレーシングチームが位置取る。長閑なパレード走行後、リアルスタートを告げる青色のフラッグが振られると、直後にケヴィン・マッカンブリッジ選手（トレニティ・レーシング、アイルランド）と、カーター・ベトルス選手（ヴィクトワール広島、オーストラリア）の2名が飛び出す。

2選手の逃げは後方集団から容認され、ラップを重ねるごとに、45秒、1分15秒、1分43秒と広がり続け、3LAP目に入る時点で3分1秒となり、前日までで2分12秒差の個人総合成績34位につけていたカーター・ベトルス選手（ヴィクトワール広島、オーストラリア）が暫定の1位となる。しかし、それでも集団は動かず、最大4分6秒まで逃げの2選手との差が広がった。スタート時は17℃と肌寒かったが、その後、時折晴れ間も現れ、24℃以上まで気温も上昇し、暖かい陽気に。

マトリックスパワータグ1チームのみが牽く後方集団は、5LAPに入る時点でもペースが上がらない。6LAP目にようやく区間勝利を狙うトレンガヌ・ポリゴン・サイクリングチーム、愛三工場レーシングチーム、JCL TEAM UKYO も先頭を牽引し始めKOMからの下りでペースアップ。差を3分22秒と縮めて7LAP目へ突入。

宇都宮ブリッツェンとしては、谷順成の個人総合上位を目標とする為、つねに谷の側にはアシストメンバーがいる。集団の中切れのフォロー、前方へのポジションアップ、機材トラブルで遅れるケースもあり、絶対にエース谷をトップグループから遅れさせぬとアシストメンバーも神経をとがらせる。

残り2周回で集団のスピードは一気に上がり、JCL TEAM UKYO、トレンガヌ・ポリゴン・サイクリングチーム、キナンレーシングチームの3チームで追う。マトリックスパワータグが先頭で最終LAPに入るものの、逃げとの差は1分52秒。

残り一周回になった時点で、カーター・ベトルス選手（ヴィクトワール広島、オーストラリア）がいなベルクで飛び出し、そのまま一人で逃げ切った。25回のTOJの歴史の中でもなかったオープニングアタックからの大逃げが決まった。個人総合成績はいなべステージ2位に入ったルーク・ランパーティ選手（トリニティ・レーシング、アメリカ）が1位となり、リーダージャージを獲得した。

最後のゴールシーン。宇都宮ブリッツェンは、谷が登りでのゴールでタイムロスしないよう、小野寺が谷を引き上げ最後の仕事を終える。谷はアシスト陣の走りに応えるよう、いなベルグをトップグループ内で駆け上がり、最小限のタイム差（20位）でフィニッシュした。

いなべステージリザルト

1位	カーター・ベトルス（ヴィクトワール広島、オーストラリア）	3:15:29
2位	ルーク・ランパーティ（トリニティ・レーシング、アメリカ）	+00:18
3位	イエルン・メイヤス（トレンガヌ・ポリゴン・サイクリングチーム、オランダ）	+00:18
20位	谷順成	+00:25
43位	小野寺 玲	+00:57
50位	本多晴飛	+05:01
60位	フォン・チュンカイ	+06:58
85位	阿部嵩之	+12:17
86位	堀孝明	+12:17

【谷順成のレース後のコメント】

チームとしては自分が個人総合順位から遅れないように全員でサポートしていくとスタートを切りました。途中で落車などもあり、遅れそうなシーンでもチームメイトが自分のところまで降りてきてメイングループに戻してくれたり、最初から最後までチームメイトが側にいてくれてメイン集団に残ることが出来ました。最後の登りゴールに向けて小野寺選手がサポートしてくれて、自分でもしっかりモガくことが出来たので状態は良いと感じたレースだった。
美濃ステージはトラブルなくレースを終えれるように走り、その次の厳しいステージ、信州飯田に向けて備えたい。

ツアー・オブ・ジャパン 美濃ステージ

プラン通り阿部が逃げに 小野寺のゴール勝負へ！

Digest movie

逃げ、ゴール前の牽引…すべて順調に進んでいたがトラブルに

ツアー・オブ・ジャパン（TOJ）も4日目。各チームで選手たちの疲れが見え始めているが、宇都宮ブリッツェンメンバーは6名とも岐阜県美濃市のスタート地点で、市指定文化財の旧今井家住宅前に元気な姿を見せた。

そこから"うだつの上がる町並み"をパレードで4km走ると、いよいよ本格的なレースが開始だ。長良川沿いの江戸時代から続く古い町並みに歴史を感じる美濃を舞台にした第4ステージは、新設された大矢田もみじトンネル先に山岳ポイント（KOM）が用意された周回コースを6周する137・3kmで争われた。

パレード区間を終えると早速アタック合戦が始まった。各チームから続々と仕掛けられ、宇都宮ブリッツェンからは逃げ番長の阿部嵩之が積極的に前に出てタイミングをうかがった。すると1周目に入って間もなく、阿部を含む5名による決定的な逃げが決まった。

メトケル・イヨブ選手（トレンガヌ・ポリゴン・サイクリングチーム、エリトリア）、ロレンツォ・ディカミッロ選手（ソフェル・サヴィーニ・デュー・オムズ、イタリア）、中井唯晶選手（シマノレーシング）、山岳賞ジャージを着る兒島直樹選手（チームブリヂストンサイクリング）と協調体制を組み、阿部は逃げ集団でペダルを回す。メイン集団も容認すると、タイム差はあっという間に1分以上になった。

この日は阿部、堀孝明、本多晴飛の3名から誰かを逃げに乗せる作戦を立てていた宇都宮ブリッツェン。幾多のレースを経験してきたベテラン阿部が、見事にタイミングを見計らって作戦を実行。これでチームメイトたちはメイン集団で脚を休めることができる。2周目を終えてコントロールラインを通過した際、逃げとのタイム差は4分35秒まで広がっていた。

だが、4周目になるとじわじわとタイム差は詰まってきた。総合リーダーのルーク・ランパーティ選手（アメリカ）を抱えるトリニティ・レーシングが集団をコントロールしていたが、マトリックスパワータグ勢も先頭に出て牽引に加勢。前日は逃げ切り勝利を許してしまっただけに、集団も脚を休めてばかりはいられない。その影響もあってか、タイム差は3分40秒前後まで縮まっていた。

5周目入ると2分20秒と一層詰めてくる後続に、逃げの5名は脚を止めることは許されない。早すぎず、遅すぎず、集団は絶妙の速さで先頭を追った。残り1周回に入ったところで、集団との差は50秒。ここでメトケル・イヨブ選手（トレンガヌ・ポリゴン・サイクリングチーム、エリトリア）と、ロレンツォ・ディカミッロ選手（ソフェル・サヴィーニ・デュー・オムズ、イタリア）の2名がそのまま逃げることを選択し、阿部を含む3名は後続を待つことに。

後続集団は残り9kmポイントで、逃げる2名をついに捉え、勝負は振り出しに戻る。KOM手前の上り区間で細かいアタック合戦が始まり集団が活性化していく。宇都宮ブリッツェンも小野寺のゴールスプリントに向けてポジションを上げていくタイミングで、フォン・チュンカイがまさかのパンクに見舞われてしまう。最後のKOMを過ぎ、下り区間で数名が離れるものの決定的な攻撃には至らず、勝負の行方はゴールスプリントに持ち込まれた。ラスト1km、ブリヂストンサイクリングと愛三工業レーシングチームがそれぞれ隊列を組む中、宇都宮ブリッツェンの赤いジャージも見える。

残り100m、後方から急激な追い上げを見せたグリーンジャージのルーク・ランパーティ選手（トリニティ・レーシング、アメリカ）が、窪木一茂選手（チームブリヂストンサイクリング）をわずかにかわしステージ優勝。個人総合成績1位の証、グリーンジャージも守った。

小野寺玲（宇都宮ブリッツェン）はゴールスプリントに挑み10位でフィニッシュした。

【西村監督のコメント】

作戦としてはチームから逃げ集団に選手を送り込み、スプリントで勝負するという内容でスタートしました。スタートして阿部嵩之がうまく逃げに乗ってくれて、いい展開でレースを進めていきました。ゴール前の小野寺の支えであったフォン・チュンカイが最後の上り手前でパンクしてしまい、本当にもったいなかった。第5ステージから厳しい山岳ステージが始まるが、そこは気持ちを切り替えて、谷順成の個人総合成績が一番大事ですので、ステップアップして成績を残すために、チーム一丸となって頑張りたいと思います。

【小野寺玲のコメント】

チームのプランに従って走れた。最終周回までみんなミーティングどおり、阿部さんも逃げて最後まで残ってくれましたし、最後の最後は自分の力でみんないくというプランどおり、最終局面までいけた。本当にここからというところでフォン選手がパンクしてしまい、そこからも残っていた晴飛が積極的にアシストしてくれて、いい位置まで残してくれたが、最後は自分のスプリント力が足りなくて順位を伸ばせなかった。最後に東京ステージが残っているので、そこに向けてアシストしつつ、しっかり残ってチャンスを繋げたいと思います。

美濃ステージリザルト

1位	ルーク・ランパーティ（トリニティ・レーシング、アメリカ）	3:08:01	10位	小野寺 玲	+00:00
2位	窪木一茂（チームブリヂストンサイクリング）	+00:00	49位	谷順成	+00:00
3位	イエルン・メイヤス（トレンガヌ・ポリゴン・サイクリングチーム、オランダ）	+00:00	62位	本多晴飛	+00:17
			80位	フォン・チュンカイ	+03:42
			85位	堀孝明	+04:39
			89位	阿部嵩之	+08:06

ツアー・オブ・ジャパン 信州飯田ステージ

新加入の本多が好アシスト 谷はステージ10位に入る

Digest movie

逃げが決まっても落ち着いて 谷の総合順位を全員で守る

日本最大のステージレース「ツアー・オブ・ジャパン（以下TOJ）」の第5ステージ信州飯田。KOM（山岳賞ポイント）へ向けた厳しい上りと、コントロールラインまで残り1kmがまた上りというコースレイアウトで、第6ステージへ進める者をジャッジする日と言ってもいい。その翌第6ステージが富士山への11kmのヒルクライムという、TOJのクイーンステージだけに、どれだけ脚を残せるかというせめぎ合いも発生するのが、レースを複雑に、おもしろくする。

1.2kmのパレード走行ののち、0kmポイント通過直後からアタック合戦が始まる。激しい打ち合いの末、全8周中2周目で8名が逃げを成功させる。メンバーは岡篤志選手（JCL TEAM UKYO）、ジェス・イワート選手（トレンガヌ・ポリゴン・サイクリングチーム）、ディーン・ハーヴィー選手（トリニティ・レーシング）、ライアン・カバナ選手、山本元喜選手（以上キナンレーシングチーム）、兒島直樹選手（チームブリヂストンサイクリング）、カーター・ベトルス選手、レオネル・キンテロ・アルテアガ選手（以上ヴィクトワール広島）。ここにフェリックス・スティリ選手（EFエデュケーション・NIPPOディベロップメントチーム）、今村駿介選手（チームブリヂストンサイクリング）が加わり、合計10名の逃げが先行する。

この逃げは強力で、集団との差は最大4分40秒ほどに。岡選手は総合8位で、総合トップのルーク・ランパーティ選手（トリニティ・レーシング）と23秒差。総合で言うとスティリ選手も25秒差で9位、キンテロ選手も28秒差で12位、今村選手も31秒差で16位。また兒島選手は山岳賞ジャージを着用しており、その次点についていたのがベルトス選手であった。この10名はほぼ全員が、このステージで各リーダージャージをモノにするという点で利害が一致していた。

こうなると逃げの勢いは止まらない。結果、集団に捕まることなく、終始落ち着いていた岡選手が単独フィニッシュでステージ優勝と総合リーダージャージを獲得した。

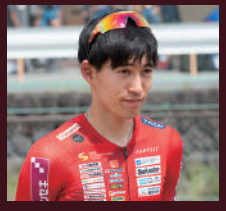
宇都宮ブリッツェンは谷順成の総合順位を落とさないのが命題で、集団内で谷を守りつつ、危険のないように待機。逃げが4分差になっても、西村大輝監督から「慌てず行こう。チームの目標のために走って行こう」と選手に声が掛けられた。最終局面まで集団内に残れていたのは谷のほかフォン・チュンカイ、小野寺玲、本多晴飛だったが、遅れたメンバーも翌日のスタートを切るために、とにかく完走を目指さなければならない。そんな献身的なチームのアシストを一心に背負った谷は、約2分半後にフィニッシュした集団からひとり飛び出し、上りをもがきにもがいてステージ10位に滑り込んだ。本多がラスト1kmの上り口まで谷を押し上げたという。

谷にとっては8日間のTOJというのは初めてで、しかも今年移籍してキャプテンに就任し重圧もあるとは思うが、最後のもがきに谷キャプテンの覚悟と意地を見ることができたのではないだろうか。しかもこの信州飯田ステージは、昨年TOJ初日で落車をして、悔しいリタイアとなった場所だ。

チームは全員無事にゴールし、TOJで最も厳しいヒルクライム、富士山ステージに向かった。

信州飯田ステージリザルト

1位	岡篤志（JCL JCL TEAM UKYO）	3:06:11	
2位	ライアン・カバナ（キナンレーシングチーム、オーストラリア）	+00:05	
3位	ジェス・イワート（トレンガヌ・ポリゴン・サイクリングチーム、アイルランド）	+00:07	
10位	谷順成	+02:31	
35位	本多晴飛	+02:48	
47位	フォン・チュンカイ	+05:42	
49位	小野寺 玲	+05:56	
64位	堀孝明	+10:20	
83位	阿部嵩之	+17:18	



【谷順成のレース後のコメント】

僕らの目標（※注 谷の総合上位を守る）を達成するために、落ち着いて走ろうということでスタートした。逃げが4分以上離れたが、その中でも自分たちの目標を見失わずに走ることができたと思う。最初から最後まで、どんな場面でも必ずチームメイトがそばにいてくれたおかげで、自分の走りに集中することができた。チームとしてはうまく走れたと思う。スタートからコンディションがいいと感じたので、富士山ももう一度集中して、これ以上のパフォーマンスを発揮したいと思う。

ツアー・オブ・ジャパン 富士山ステージ

孤独な戦いのヒルクライム 出し切った谷が総合11位に

Digest movie

チームのアシストに頼れないが ひとりで戦う覚悟を見せた谷！

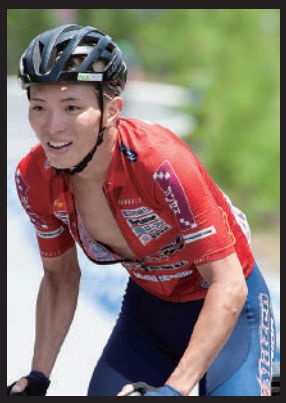
「富士山を制する者はTOJを制する」と言われるほど、今大会で最も重要な第6ステージ富士山。道の駅すばしりから平均勾配10%の上りをいきなり上り始め、ふじあざみラインを経て富士山須走五合目の駐車場へとフィニッシュする。途中22%の最大勾配もあり、標高にして1,160mを一斉スタートで駆け上がる。昨年は富士スピードウェイから走ってきてこの上りに入ったが、今年はそこがカットされ、2017年以来のヒルクライムステージとなった。

宇都宮ブリッツェンのエースを担う谷順成は、全8ステージというフルスペック開催のTOJは初めてで、しかも昨年は第1ステージだった信州飯田ステージで落車をして、大会最初のリタイヤ者になっている。それだけに、「無事に富士山ステージを迎えること」がまず最初の目標であり、そのスタート地点に立ったときに初めて「全力で出し切る」と力強く語った。エースとしてこれまでのステージは、チームメイトに守られ、補給やトラブルもチーム一丸となって対応をしてくれ、総合順位を落とすことなく走り切ることにフォーカスしていた。富士山ステージは脚質の違いでまとまって走ることは難しいとわかっていたので、スタート前から覚悟の言葉を露わにしたのだ。「みんなのお陰で、今日、総合争いができる。あとは自分が出し切って、良い順位を取るだけ。富士山ステージは出し切るしかない。ただ、周囲を見ながら、着いて行くところ、自分のペースで行くところを見極めて、しっかりコントロールし、あわてずに行きたい」と、スタート前に谷は語った。

その言葉通り、谷は素晴らしいパフォーマンスを魅せてくれた。ステージ12位、トップと3分16秒差、リザルトの前後を見ると外国人選手の名前ばかりが並ぶ。日本人最高位は小林海選手（マトリックスパワータグ※昨年のTOJ山岳賞、Jプロツアー年間個人総合優勝）に明け渡してしまったが、その次点となる日本人選手2番手でフィニッシュした。個人総合リーダージャージをまとった岡篤志選手（JCL TEAM UKYO）よりも速かった。総合順位も前日の15位から11位に。第3、4ステージが18位なので少しずつ上昇しており、トップ10入りまであと一歩のところまで来た。ちなみにこの時点で総合10位のホセ・ビセンテ・トリビオ・アルコレア選手（マトリックスパワータグ）とは19秒差。谷はまだまだ上を目指せると感じているとのことで、その辺りは下記にあるレース後コメントを参考にされたい。

レースのほうは、スタートから4、5㎞でステージ優勝候補たちに絞られ、昨年もランデブーをしたネイサン・アール選手（JCL TEAM UKYO）、ベンジャミン・ダイボール選手（ヴィクトワール広島）の一騎打ちとなったが、脚が止まり始めたダイボール選手を見逃さなかったアール選手が残り4㎞地点で一気に加速。ステージをものにし、総合リーダーも岡選手からアール選手へ、チーム内でのジャージの移動という結果となった。

なお、宇都宮ブリッツェンは誰一人タイムアウトになることもなく、全員がフィニッシュしている。注目したいのは本多晴飛の結果だ。新加入の本多は未知数の多い23歳で、TOJは初出場ながらも臨機応変にアシストとして大活躍しており、今日の富士山ステージは谷に次ぐチーム内2番手で、しかも、多くの選手が蛇行しながらフィニッシュするなか、淡々と軽いペダリングで上ってきた。谷、本多と、新加入の選手がこうして活躍を魅せるTOJとなっているようだ。



富士山ステージリザルト

1位	ネイサン・アール（JCL JCL TEAM UKYO、オーストラリア）	0:40:14	
2位	ベンジャミン・ダイボール（ヴィクトワール広島、オーストラリア）	+00:34	
3位	ドリュー・モレ（キナンレーシングチーム、オーストラリア）	+01:19	
12位	谷順成	+03:36	
39位	本多晴飛	+07:01	
55位	フォン・チュンカイ	+09:52	
61位	小野寺 玲	+10:47	
68位	堀孝明	+12:09	
84位	阿部嵩之	+17:36	

【谷順成のレース後のコメント】

序盤からペースが速かった。実際、過去の自分のタイムと比較しても、先頭集団のペースが速すぎたので、ペースを切り替えた。最終的に 12 位まで自分を押し上げることができた点は良かったと思う。この作戦ができたのも、1 か月ほど前に西村監督サポートのもと、試走することができたのも大きかった。また前夜、沢田時選手からも「プレッシャーかかるだろうけど、頑張って」と個人的に LINE が入り、こうしてチームメイト全員から励ましの声が掛かり、それが力になった。5 日間走った後にベストタイムが出せたのは、ここまでいい練習を積んでこられた証だと思う。まだまだ上を目指せると感じているので、次も集中して走りたい。

ツアー・オブ・ジャパン 相模原ステージ

実質総合順位の決まる日 谷を全員で押し上げる

Digest movie

逃げにも参加し積極的な展開 だが総合10位へは一歩及ばず

昨年は雨の中のサバイバルレースとなった相模原ステージ。今年のツアー・オブ・ジャパン（以下TOJ）は連日天候に恵まれ、この日も青空の下でスタートの号砲が鳴った。

この日は旧小倉橋や神奈川国体でも使用された宮ヶ瀬湖沿いのワインディングロードなど、サイクリングにはうってつけの風光明媚なコースで争う107.5kmだ。適度なアップダウンもあり、日頃からサイクリストたちでにぎわっている。しかし、TOJ最終日前日ともなると選手にとってキツい展開も予想され、総合11位の谷順成キャプテンは「相模原が一番ハードなステージになると思う」と語っている。沿道ではスティックバルーンを叩いて声援を送る地元住民やファンの姿が多く見られた。

パレードを終えた直後から各チームのアタッカーが逃げるタイミングをうかがっており、宇都宮ブリッツェンでその役割を担うのはベテランの阿部嵩之だ。スタート前に阿部は「色んなチームが攻撃を仕掛けてくると思う。我々も攻撃に参加して、（谷）順成の順位を一つでも上げるチャンスを広げていきたい」と話していた。谷は前日の富士山ステージでも区間12位、日本人選手としては区間2位と好走。チームとしては谷を個人総合トップ10に押し上げたい。

2周目、3周目と阿部が何度も5名程度の逃げ集団を作ろうと前方で動くが、なかなか大集団から逃げが容認されることなく周回が重ねられる。集団では山岳賞ジャージを巡って、チームブリジストンサイクリングとヴィクトワール広島による駆け引きが行われていた。

5周目の中間スプリントとポイント前で一人集団から飛び出したのはフォン・チュンカイだ。そのままトップで通過すると後続に吸収されてしまったが、その直後に今度は本多晴飛が単騎でアタック。今季から宇都宮ブリッツェンに加入した本多の走りはチームメイトの評価も高い。しかし、終盤に向けて活性化している後続が間もなく本多に追いついてしまった。2人のチャレンジは収束してしまったが、これは今後のレースに活きる経験だろう。

6周目に入って日本人選手5名が10秒ほどリードする場面もあったが、これも4kmほどの逃げに終わった。決定的な逃げが決まらぬままファイナルラップに突入するかと思われたが、南アフリカ出身のケイラム・オーミストン選手（チームグローバル・シックス・サイクリング）がアタックする。しかし、これも後続が抑えてしまう。

いよいよ集団スプリントが予想される展開になり、残り5kmを切ると集団はマトリックスパワータグやキナンレーシングチームが先頭を牽引する。そんなチームプレイを寄せ付けず、残り300m辺りで早々と仕掛けたのはポイント賞ジャージを着たルーク・ランパーティ選手（トリニティ・レーシング）だ。力強い走りで今大会3勝目をもぎとった。

宇都宮ブリッツェンは谷の17位が最高位、個人総合順位は変わらず11位。チームは勝負に絡むことはできなかったが、阿部、フォン、本多と見せ場を作り、赤い稲妻の存在感をアピールできた。

相模原ステージリザルト

1位	ルーク・ランパーティ（トリニティ・レーシング、アメリカ）	2:23:26
2位	ベンジャミ・プラデス（JCL JCL TEAM UKYO、スペイン）	+00:00
3位	岡篤志（JCL JCL TEAM UKYO）	+00:00
17位	谷順成	+00:00
54位	小野寺 玲	+00:45
55位	本多晴飛	+00:45
62位	フォン・チュンカイ	+01:16
69位	阿部嵩之	+01:57
81位	堀孝明	+04:43

【西村監督のコメント】

前日のミーティングで、ニュートラルが解除された後にアタック合戦が激しくなると予想した。その通りの展開となり、チームとしてもそれに参加して全員で攻めていった。ゴール前で谷がちょっと埋もれてしまったが、総合 11 位はキープできた。最終ステージは残っている力を出し切って、スプリントで勝負したい。

ツアー・オブ・ジャパン 東京ステージ

最後のスプリント勝負 小野寺玲が納得の3位

Digest movie

各自が果たすべき役割をこなし充実したTOJだったと小野寺

ツアー・オブ・ジャパン（以下TOJ）もいよいよファイナルステージ。締めくくりの舞台となる東京・大井埠頭に宇都宮ブリッツェンメンバー6名は誰一人欠けることなくたどり着いた。大井埠頭は都心のホビーライダーたちの切磋琢磨の場として古くから親しまれ、TOJ最終日の恒例コースだ。かつては日比谷シティ前からパレード走行後に大井埠頭に突入して本格的なレース開始となったが、近年は周回コースのみで開催されている。

序盤から激しいアタック合戦が繰り広げられた東京ステージ。最終日だけに翌日のことは気にせず、力の限りペダルを踏み込む選手たちの中から抜け出すのは容易ではない。誰かが仕掛けると、すぐさまチェックが入る。ド平坦の大井埠頭だが、海からの向かい風を受ける区間もあるだけに簡単にはいかない。前日の相模原ステージは結局逃げが決まらずスプリント勝負になっていたが、東京はどうだろうか。

2周目に入って3選手が逃げたと思われたがローテーションがうまく回らず1周ほどであえなく吸収。次に4選手がタイミングよく飛び出した。橋川丈選手（EF エデュケーション・NIPPO ディベロップメントチーム）、佐藤光選手（さいたま那須サンブレイブ）、小林海選手（マトリックス パワータグ）、石原悠希選手（シマノレーシング）の順で4周目に入り、そこに追走のジェス・イワート選手（レンガヌ・ポリゴン・サイクリングチーム、アイルランド）が加わった5名の逃げ集団が形成された。4周完了時点で後続とのタイム差は約30秒に広がり、レースは一旦落ち着いた。後続は個人総合リーダーのネイサン・アールUKYOが先頭でコントロールする。

宇都宮ブリッツェンは逃げには加わらなかったが、東京ステージはスプリント勝負が見込まれる。チームでスプリントを託される小野寺玲は「無事に全員でここにたどり着けたことが嬉しい。総合順位も目標にほぼ届き、あとは自分自身が見せ場を作れるか」とレース前に語った。個人総合11位につけるキャプテンの谷順成、幾度も逃げで見せ場を作ってきた阿部嵩之などTOJでも存在感を示してきた宇都宮ブリッツェンだが、まだ勝負に絡めていない。栃木から応援に駆けつけたファンも多く、最後にガツンと行きたいところだ。

周回を重ねてタイム差を広げる逃げの5名。6周を終えて1分を越えると、最大1分50秒ほどのアドバンテージを得た。しかし、終盤が近づくにつれて集団がギアを上げてくるとその貯金もすぐになくなる。12周目が終わるまでに30秒も詰めてくると、残り4周でその差は1分強。後続は JCL TEAM UKYO のほか、マトリックス パワータグなども加勢して一気にペースアップ。先頭では小林選手、石原選手、佐藤選手が加速して少しでも長く逃げようと3名体制で新たな旅を始めた。

残り2周で逃げの3名と集団の差は1分。だが、1周7㎞で本気を出した集団から逃げ切るのは難しかった。ファイナルラップ突入時点で15秒差まで詰め寄られ、それから間もなく3名は吸収された。一つになった集団では選手たちの位置取りが激しくなった。宇都宮ブリッツェンも小野寺がフォン・チュンカイにサポートされながら展開をうかがい、最終コーナーはチームブリヂストンサイクリングの窪木一茂選手ら2名に続くポジションでこなす。しかし、窪木選手がトラック競技で鍛えた脚力でスプリントを制して勝利をつかみ取った。小野寺も伸びを見せたが惜しくも3位に。

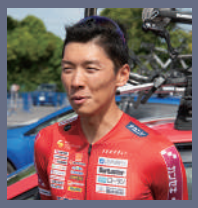
4年ぶりのフル開催となったTOJ。宇都宮ブリッツェンは谷が個人総合11位で終えた。外国選手が上位を占める中、日本人選手としては2番手だ。この順位は谷自身のポテンシャルはもちろんだが、チーム力も要因になっているはずだ。

富士山ステージ後に谷が「チームみんなで走っている、というのを感じた」と語っていたが、自転車ロードレースは「個人の力」と「チームの力」が試される競技。阿部嵩之、フォン、堀孝明、本多晴飛、そして小野寺が各ステージでそれぞれの役割をしっかりこなし、キャプテンを支えてきた。区間優勝は叶わなかったが、全員で東京ステージまで来れたことは新メンバーで迎えたTOJ一番の収穫であり、シーズン後半に向けて道標になってくれるだろう。

東京ステージリザルト

1位	窪木一茂（チーム ブリヂストン サイクリング）	2:22:30
2位	岡本隼（愛三工業レーシングチーム）	+00:00
3位	小野寺玲（宇都宮ブリッツェン）	+00:00
27位	阿部嵩之	+00:00
38位	フォン・チュンカイ	+00:00
51位	谷順成	+00:00
69位	本多晴飛	+00:50
75位	堀孝明	+01:20

【小野寺玲のレース後のコメント】



僕だけに（勝利の）照準を絞って、最初から最後までチームメイトに助けてもらった。最後はプラン通りにはいかなくても、みんなのおかげでいい位置からスプリントに臨めた。初めて東京ステージでちゃんと勝負できたが、決めきれずに3位という結果で悔しい。（ゴール前で）フォンの後ろは外さないように走ると、最後はいいところまで一人でさばいて連れていってくれた。頼りになるリードアウトだった。新しい体制で挑んだ TOJ、不安もあったが各ステージで自分自身の成長も感じられ、チームメイトとも共に戦う気持ちで熱くなれた8日間だった。充実して、自分史上最も納得のいく手応えのあったTOJ だったと思う。ファンの皆さん、東京ステージを赤く染めていただきありがとうございました。勝つ姿を見せて喜びを分かち合いたかったが、皆さんの応援のおかげでいいレースになりました。

やわたはま国際MTBレース2023

UCIレースで沢田優勝！アジア大会の日本代表に

Digest movie

シクロシーズンから2位が多く ゴール後は涙が込み上げて…

8日間のTOJがファイナルステージの東京でのフィニッシュを迎える頃、沢田時は愛媛でMTBレースのスタートを切っていた。

愛媛県八幡浜市でおこなわれた「やわたはま国際MTBレース2023」。会場となった八幡浜市民スポーツパークのMTBコースは、沢田自身も何度も走り、2021年にはこの地で全日本チャンピオンとなった相性の良い地だ。

この大会の優勝への想いはひとしおのものがあった。まずは来年のパリ五輪出場への布石。パリ五輪の代表に選ばれる確実な手段は、今年10月26日からインドで開催されるアジア・マウンテンバイク選手権大会に優勝することだ。そのアジア選手権に出るためには、UCIポイントで日本人上位にいなければならないが、このやわたはま国際で勝つと100ポイントが入る。これは非常に大きい。アジア選手権の日本人出場枠は4人の予定で、すでに北林力選手（TEAM Athlete Farm SPECIALIZED）が内定しているので、残り3枠を争う形で今大会の出場となった。

またこの大会に勝つと、9月23日から開催されるアジア競技大会（中国杭州）に出場できる。4年おきに開催される、いわば五輪に準ずる大会で、沢田自身も2014、2018年と過去2回出場しており、是が非でも今回も出場したいところだった。

やわたはまのコースは何度も走っているとはいえ、フルサスバイク（前後にサスペンションのついたフルサスペンションバイク）で走るのは初めての沢田。前日に試走を何度も重ね、スタートラインについた。

スタートは実は少し失敗をした。ペダルのキャッチをし損ねたのだ（ビンディングペダルと言って、スキー靴のようにシューズをペダルにはめ込むシステムがあり、そこにはめ損ねた）。だが今の沢田は冷静だった。宇都宮ブリッツェンに移籍してチームメイトと積んできたロード練習。このコースはスタート後の平坦区間が比較的長く、すぐにペダルをはめ直し、集団の中でターゲットとなる選手を見つけ、冷静に後ろにつくことができた。宇都宮ブリッツェンに移ってきて、集団の中での位置取りが冷静になったという沢田。

そしてターゲットとしていたのが、平林安里選手（TEAM SCOTT CHAOYANG TERRA SYSTEM）だ。平林選手は下りが速く、沢田は、まず最初の長い下りで平林選手の後ろについてリズムよく下り、次の激坂「桜坂」で平林選手を離しに掛かる作戦に出た。

この大会の前、沢田は下りの練習を増やした。フルサスバイクは、下りの感覚がかなり変わるし、ましてや、今年ここまでメインにしていたロードバイクやシクロクロスバイクともまったく違う。新しいバイクで下りの感覚を体に植え付け、オフロードコースへの目も養っていった。

沢田の作戦は見事的中し、2周回目に入るときには、平林選手と数秒の差が開く。しかしまたここは冷静に、意図してスピードを緩める沢田選手。下り区間は平林選手の後ろにつき、再び桜坂で引き離す。全7周回の内、2周目で独走は少し早いようにも感じていたが、調子の良さと、他選手の状況を見て、沢田は一人旅のほうの道を選んだ。

独走状態になってからは、パンクや落車がないよう、下りはスピードを緩めていないに下り、上りでスピードアップを繰り返していくうち、ライバルたちをどんどん置き去りに。

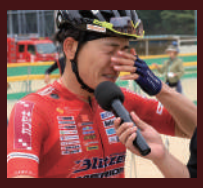
最後は2位に1分56秒差もつけて、赤いジャージをフィニッシュラインに見せた。両手を広げて空を見上げ、何度かガッツポーズ。ラインを越えたあとは、新しい相棒のMTBを掲げて、勝利の雄たけびを上げた。

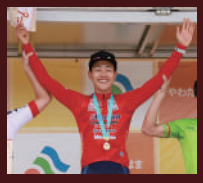
これにより沢田は、アジア競技大会への日本代表に決定。自身3度目となる出場をモノにした。

宇都宮ブリッツェンに移籍し、ロードレースにも力を入れ、日々チームメイトたちと研鑽を積んでいただけに、この大会とツアー・オブ・ジャパンが重なったことを、とても残念に思っていた沢田。でも、ツアー・オブ・ジャパンで頑張っているチームメイトの姿に刺激を受けたという。宇都宮ブリッツェンにとっても3競技は新たな挑戦だが、沢田のこの優勝で、またチームが一層強くなっていく気がしてならない。

やわたはま国際 MTB レース 2023 リザルト

1位	沢田時（宇都宮ブリッツェン）	1:28:01
2位	平林安里（TEAM SCOTT CHAOYANG TERRA SYSTEM）	+1:56
3位	佐藤誠示（SAGE'S STYLE）	+5:24





【沢田時のレース後のコメント】

作戦通りに進めることができた。シクロクロスシーズンから 2 位が多く続いていたので、優勝できて込み上げるものがあった。八幡浜のコースは中学生の頃から走っているし、全日本チャンピオンにもなった地なので思い入れのあるコース。しかも、ここで勝てばアジア大会に出られるので、今年、まず最初に目標にしていたレース。アジア大会は過去2回出て、本当に大きい大会だとわかっている。そこで優勝することはアスリートとして名誉なことなので、まずは出場の切符を得ることができ、ほっとしている。次は 7 月の全日本選手権での優勝とアジア大会、そしてアジア選手権での優勝を目指してやっていきたい。

宇都宮ブリッツェン選手、ブリッツェンラヴァーズと走る 湧水の郷しおや サイクルピクニック 2023 with 宇都宮ブリッツェン

参加者募集中！

街の喧騒を離れ、四季折々の風景が織りなす自然の宝庫「しおや」の魅力を存分に味わえるサイクリングイベントです。

栃木県内でも屈指の人気を誇る道の駅「湧水の郷しおや」をスタート・ゴール地点とし、付近一帯が樹齢数百年にも及ぶ原生林に覆われ、清らかで澄んだ水が湧き出る尚仁沢湧水群まで上る中級者～上級者向けの「尚仁沢コース」58㎞と、町のシンボルであり日本百名山の一つである高原山の麓、星ふる学校「くまの木」までのんびり走る初級者から中級者向けの『くまの木コース』39㎞の2コースを用意しています。

▼開催日
2023年7月1日（土）

▼会　場
道の駅湧水の郷しおや
（栃木県塩谷郡塩谷町船生3733の1）

▼主　催
宇都宮ブリッツェン運営会社
サイクルスポーツマネージメント株式会社

▼参加コース／参加料／募集人数
尚仁沢コース　：約58㎞（中学生以上）
6、000円　／　30名限定
くまの木コース：約39㎞（小学4年生以上）
4、000円　／　30名限定

▼走行方法
・参加者は、5名～6名ずつ、2分間隔でスタートします。
・先導を必要とする参加者は、ガイドライダーに従い道路交通法を遵守し、基本的に車道の左側を一列で走行する。
・左記URLよりコースのGPSデータをダウンロードし、スマートフォンやナビ機能付きのサイクルコンピュータを利用して先導を必要としない参加者についても、道路交通法を遵守し基本的に車道の左側を一列で走行する。

【尚仁沢コース（約58㎞）】
https://ridewithgps.com/routes/42431088

【くまの木コース（約39㎞）】
https://ridewithgps.com/routes/42431101

▼募集期間
6月7日（水）～6月23日（金）13時まで

▼申込方法
専用の申込フォームから必要事項をご入力のうえお申し込みください。
【申込フォーム】
https://forms.gle/7kRCJ6pZKDNFRUPC9

▼お問い合わせ
湧水の郷しおや サイクルピクニック 事務局
（サイクルスポーツマネージメント株式会社 内）
電話：028-611-3993
メール：event@blitzen.co.jp

私たちは宇都宮ブリッツェンを応援しています。

MERIDA　MIYATA　カンセキ
下野新聞社　ORES　TOYOTA WOODYOU HOME　日成メディカル
ナカニシ　SHIMANO　足利銀行　ローラン　Mitutoyo　住めば愉快だ宇都宮　HONDA　この街を走る幸せを、ともに Honda Cars 栃木中央
作新学院　栃木信用金庫　渡辺建設株式会社　とちテレ　弱虫ペダル　仲田総業株式会社　TOCHIGI
GOKO human link corporation　TCB観光　ケイズブレイン　NIPPON EXPRESS　UDOKEN　SOA　株式会社 ティーツーテクニカル
フクダヘルシー　くにい矯正歯科　関東自動車　宇都宮食販　たちつてとちぎ　SurLuster
Dexerials　CRTハウジング　たいらや　TIGER　Continental Home　JARBIS　Kids Corporation Holdings　日本米穀給食協会　㈱松本建設　榮商事株式會社　Apec's
KODAIRA ENTERPRISE　坂田新聞店　ZEST　こくみん共済 coop　藤井産業　NIKKANE　seibu　Power Pharmacy　PATISSERIE QUEEN　MIZUHO　みずほ証券
多賀山不動産　横尾製作所　Wellness　株式会社 ツカサ精密　momiya　宇都宮中央法律事務所　栃木トヨペット　TAKATSUE MTB RESORT　山陸　渡辺産業株式会社
UBC 宇都宮文化センター株式会社　Fuji Logicargo　有限会社 大草鉄工建設　Sokan　野村證券　PR TIMES　近畿日本ツーリスト　石井機械建設　ISHIKAWA　第一生命 Dai-ichi Life Group
ROOTS SPORTS JAPAN　景観プランニング　鹿野建設株式会社　Daiwa House　植木鋼材株式会社　BIWAMIN　YUU YUU WORLD　ライフガーデン　PASEO